

石クリ通信

8月号
夏特別号

ハエ取りの技術

院長 石川 悟

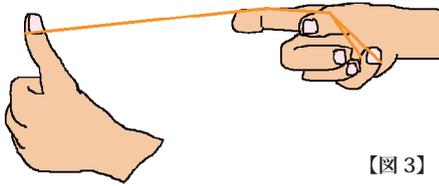
最近では冷暖房が当たり前、またすべての窓に網戸が当たり前になってきて、部屋の中でハエが舞っている風景は少なくなりました。殺虫剤も強力になり、ハエには苦難の時代と言えてしまう。昔は夏になるとベタバタのついた「ハエ取り紙」をぶら下げたり、食卓の上にハエ除けの蠅帳が載せてあるのが、一般的な風景でした。

なつかしいもののひとつは、ハエ取りの筒。夜、天井に止まっているハエを長いプラスチックの筒の中に落とし込む優れもの。手元に水が入っていて、死んだハエがたくさん詰まっているのを見るのが嫌でしたが・・・

何十年前前に見た「宮本武蔵」の映画で、武蔵が食べ物に群がり飛んでいるハエを箸でつかむシーンがありました。実話ではないかも知れませんが、常人ではとても考えられない動体視力のよさです。飛んでいるハエは無理ですが、止まっているハエを素手でつかむのは比較的簡単なので紹介します。

手を軽く広げて、ハエにそっと（できたら後方から）近づきます。五・六センチまで近づいたら、ハエの前方約三十度上方にハエがいると仮定して、一気につかむ動作をします（図1、図2参照）。

【図3】

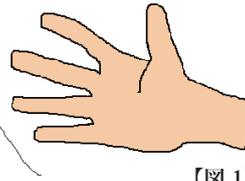


手が動き始めと同時にハエはすごい勢いで逃げますので、追いかけるようにつかもうとしても間に合いません。逃げ方はほぼ一定なので、最初から逃げるルート（ワンポイント）で捕まればバッチリキャッチ。その後床にたたきつける前、窓から逃がすかほご自由に・・・三十年以上前、田舎の病院の手術室に紛れ込んだハエをこの方法で捕まえて、拍手喝采されたのを覚えています。

グッ!



【図2】



【図1】

今回の石クリ通信はなぜか動物関連の話が多くなってしまいました。スペースが少し残っているのので、追加の話を・・・

筑波大のレジデントの時に、ラットを使った血管吻合の練習をやりました。他の科の医師が実験用に購入したラットが余ったので使いました。か、という話があり、それならラットを使つて顕微鏡手術の練習をしよう、と上司の講師の先生と計画しました。ラットは普通のネズミよりふたまわり位大きなネズミで、慣れないと扱っても簡単ではありません。

研究棟は5時までしか冷房がなく、夜の8時過ぎから窓を開け放して、汗まみれ、蚊取り線香を焚きながら、ラットと格闘しました。

まずラットに麻酔をかけます。動物用の麻酔器など有りませんでしたので、素朴な方法でやりませんでした。エーテルを浸したガーゼをクッキーの缶に入れ、ケージから出したラットをすかさず押し込めて、蓋をします。最初暴れますが、おとなしくなったのを見計らって、仰向けに寝かせて、手術を開始します。顔の上に載せたガーゼに時々エーテルをたらして、麻酔が覚めないように注意します。エーテルをたらし過ぎて、手術に夢中になっていると、呼吸しないで死んでしまうこともあります。

手術用の顕微鏡を使って大腿動脈や外腸骨動脈の吻合の練習をやりました。まず動脈を切断して、端々吻合や、その頃発表されたスリーブ吻合という血管を血管の中に押し込んで吻合するやり方で血管をつなぎました。吻合が凸凹したり、バランスが悪いと、出血したり、血液がうまく流れず血栓ができて、血管がつまります。うまく行くとピタッと血管がくっつき、出血せず、きれいに血液が流れます。このような練習のおかげで手術もだいぶうまくなりました。

最近では腹腔鏡の手術やロボットの手術のトレーニングをパソコン（ヴァーチャル・リアリティ）で行うのも一般的になって来ましたが、実際の手術とはだいぶかけ離れています。その点動物を使った実験やトレーニングは、医学・医療の発展にはこれからも絶対に必要なものではないでしょうか。筑波大では貢献してくれた動物たちへの感謝と慰霊のため、年に一度慰霊祭を行っていました。

ラットとの夏

日立は虫の宝庫

事務長 石川 都

東京生まれの私は小さい時から虫が大の苦手でした。腕にとまった蚊をつぶすのがいやでフウッと息で追い払い、叱られた覚えがあります。

ところが日立で最初に住んだ会瀬社宅は築五十年ほどの古い建物で、周囲にはあらゆる生き物や虫がいました。引越して早々、庭にいた二十センチもある巨大ミミズを娘が棒ではさんで渡してくれた時には悲鳴をあげました。遭い、春先の一晩中蛙が鳴いていた翌朝には、側溝に巨大イクラやヘビのような卵があふれているので、側溝になりまして。また台所のパンが齧られているので不思議に思うと、白い小さなネズミが視界を横切ったり・・・と本当にいろいろありました。

ゴキブリ一匹にも悲鳴をあげれば誰かが来てくれた昔と違い、何が出しても一人で始末せざるをえないようになると、さすがの私も遅くなり、今ではムカデが出ようがゲジゲジが出ようが全くたじろがなくなくなりまして。さすがに今でも虫めずる・・・までには至っていませんが、虫ゆえに土いじりが苦手だった私も、最近は園芸も少しずつ好きになってきましたね。人とは環境に慣れるものですね。

生きもの珍体験・海外編 その二

「ビンタン島のオオトカゲ」

国際学会で行ったシンガポールから足を伸ばし、インドネシア領のビンタン島に行きました。ホテルにはヤモリの大量もいましたが、最大の驚異は、中庭をのっしのっしと歩いている体長二メートルくらいあるオオトカゲでした。だれも驚かず普通に眺めており、ゴルフ場ではカーでもオオトカゲが悠然と横切るのを信号待ちのように待っていました。ホテルのスタッフも、客が遊び半分にチキンを出したら手首ごと食べられてしまったと事もなげに言うので、それからは庭に出るたび、長いしっぽの先がその辺に隠れていないかと、戦々恐々と歩いています。

「テキサスのアルマジロ」

アメリカにいた頃、テキサスの高速道路を走っていると、車に轢かれた得体のしれない死骸がたくさんありました。速度を落とすと眺めながら走り、犬でもないし、猫でもないし：何か堅いウロコみたいなものがあるけど・・・？と不思議に思いつつ、州の観光協会の建物に入ると、ネズミが亀の甲羅をかぶったようなぬいぐるみ山ほど！あれだ！と声を上げたのは、何とテキサスの州の動物アルマジロでした。まん丸くなる動物と本で知ってはいましたが、実物を見たのは初めてでした。